



馬 耳 東 風

東京の都市拡大を引き受けたような多摩丘陵があり、特に巨大化した八王子市は56万の人口を抱え、今や大学数13を超える学園都市として発展した。交通機関の利便もあって高尾山（599 m）は年間260万人が訪れるという登山者数世界一の、まさにラッシュ登山の山だ。また、甲州街道多摩御陵参道のイチョウ並木は圧巻で、絹織物で栄えた往時をしのぶクワ並木とともに街をシンボライズする。

かつて都市計画が進行する中で農住共存構想が浮上し、都市中心から田園都市づくりが進められた。あまり知られていない「学農」草の根運動があった（学農記念誌1990）。置き去りにされたような農住混合の丘陵地で都市型農業が取り組まれた。明治維新後、漢学者 村田直景から学んだ井草甫三郎は、「男子困ることなかれ、牝牛を飼いうれば子に子を産んで極まりやむことなし」に因んで、養蚕地帯にあって蚕の残渣を牛に食わせ、排泄物を堆肥に活用した循環型有畜農業の先達であり、いわゆる多摩酪農の理念と発展につながっていった（多摩酪農の創始者・井草甫三郎伝1983）。

八王子市は、延喜16年（916）牛頭天王8人の王子を祀った八王子権現に由来する地名といい、市政施行（1920）後、9旧町村を合併して巨大化した。都心から西へ40 km、新宿から電車で約40分の距離にあり、かつて関東を支配した小田原北条氏の支城として滝山城跡

と八王子城跡がある。学園都市の周辺部は農地を含めた豊かな風景が残っている都内初の中核市でもある。

高田千鶴著「牛がおしえてくれたこと2024」は八王子の牛と人の幸せな牧場として表現され、牛を取り巻く活写ずばりの記録で構成される。取材写真は市内文化会館で展示され多くの関心を呼んだ。酪農ヘルパーの経験を持つ著者は、「牛写真」家として命の輝き愛情や感謝の気持ち、別れの痛みを体感してきた。全国取材を続け、特に東京多摩の酪農家の生命誕生に目を向けた泊まりがけ取材は見事である。多摩酪農を出発点とする都市酪農家の自信がにじむ生き方に感動する。「レインボーミルクの夢」は何と7種類の乳牛を飼ってレインボーのミルクをつくることだと賛美する。その品種をあげると、ホルスタイン・ジャージー・ブラウンスイスはもちろん、ガンジー・エアシャー・ミルクキングショートホーンと並び、7種目の真っ白い顔のモンベリアードがホルスタインの借り腹で誕生した。新しいクロスブリーディングへの期待が広がる。その出産を徹夜で見守り誕生の様子を時系列で記録した。生まれるよろこびを素直に表現し夢を輝かせる。酪農体験を学校現場へ持ち込み牛に触れさせながらの体感教育は実に見事だ。また、人のために命をささげる別れのシーンは、心が裂けるような峻厳の現実を母の眼で見事にとらえている。都市化の中で生命を育て守り、生きる農民の暮らしを共有する姿は何と素晴らしいことか。命と共に生きる魂の賛歌だ。

（柏）